



親鸞聖人と伝道

大田利生 (おおた りしょう)

親鸞聖人の生涯をふりかえるとき、法を説く姿よりも、法を聞く姿が思い浮かんでまいります。如来のまことを聞思して生きていかれたそのことが、まわりにも大きな影響を与え念仏者の輪が広がったということだといえます。

したがって、聞法のすがたがそのまま伝道であり、伝道ということは聞法していく態度以外にはないといえます。それは、聞法ということをも基盤にしない伝道はありえないし、伝道に展開しない聞法ということも考えられないということでもありましょう。

ところで、聞法の聞とはどのように考えたらいいのでしょうか。浄土真宗の教えは「ただ聞くだけでいい」と申します。しかし、それはただじっと、漫然と安易に聞いておればそれでいいということではありません。仏教では、聞・思・修の三慧を説いています。聞の成就は、思・修の成就においていえるのだという意味に解することができます。また、『大無量寿経』のなかには「設満世界火、必過要聞法」とも説示されます。仏法は単に知識として頭で理解するだけではないのだということも知らされます。よく耳にすることばに聴聞という語があります。聴も聞もともに「きく」ですが、聴は往くをいい、聞は来るをいうとあります。ここでも、聞くということがじっと聞いていればそれでいいということでないことが伝わって来ます。

親鸞聖人は聞について、よく知られたことばですが、次のようにいわれます。

しかるに『経』に「聞」といふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり。

(「信巻」『註釈版聖典』二五一頁)

ここに、本願の生起本末を聞くとは、本願のめあてである私について聞くことであり、また、その本願の全体について聞くということでもあります。常に罪悪深重の私の姿と、そういう私を見捨てることなく、攝取したもう仏の慈悲のこころを信じていくということでもあります。このなかで、私の姿を深くみつめていくことは簡単な聞き方からはできることではないといえます。

ところで、親鸞聖人の伝道の原点を示すことばとして「自信教人信」の語がよく用いられます。これは、善導大師の『往生礼讚』のことばですが、『大無量寿経』の

もしこの経を聞きて信樂受持することは、難のなかの難、これに過ぎたる難はなけん。(『無量寿経』同 八二頁)

の文を讀じて「自信教人信 難中転 更難 大悲伝 普化 眞成報 仏恩」といわれます。この文をそのまま読みますと、自らの力で人に法を伝えていこうという意にとれるのですが、親鸞聖人は、私が大悲を伝えるのではなく、法自らが伝わっていく、そのように受けとっていかれました。

もし、私が伝えていくことのできる法だとするならば、聞法のすがたが伝道だということと矛盾することにな

ります。法はどこまでも聞いていくもの、親鸞聖人は四海の内皆兄弟という立場に立って、ともに大悲を聞く姿勢で一貫されていたということです。「弟子一人ももたず」ということばにもそのことがよくあらわれているといえましょう。

また、親鸞聖人は「聞くところを慶び、得るところを嘆ず」といわれ、信心の慶びがあらわされています。その信心よろこぶ姿がそのまま伝道になっているといえます。ところで、仏法を聞いていかれる態度について『歎異抄』にもよく知られた唯円房と親鸞聖人との対話があります。唯円房が念仏しても踊躍歡喜のころ、いそぎ浄土へまいりたいところが起こらないことを親鸞聖人に尋ねると、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり」と述べ、そこから共に如来の真実に聞いていこうという態度をうかがうことができます。

そういう姿勢からは親鸞聖人と門弟とのあたたかいつながりも見逃しえないことだといえます。「明法御房の御往生のことをまのあたりきき候ふも、うれしく候ふ」と述べられます。お互いに慕い、敬うころそれは信頼関係のなかに生れるころですが、それが伝道のもう一つの原点になるといえます。

このように、親鸞聖人と伝道を考えるとき、著述のなかに譬喩を多く用いられていることも注意させられます。譬喩を用いて法義の本質をあらわされています。阿弥陀仏の本願力を磁石に喩えられておられるのもその一つです。「なほ磁石のごとし、本願の因を吸ふがゆゑに」の文です。本願の因とは、本願を起さしめる因となった煩惱具足の凡夫のこととうかがうことができます。釈尊をはじめ、高僧そして蓮如上人にいたるまで、譬喩を通して仏法を伝えてこられました。そのことの意味は重要です。いずれにしても、仏法を聞いていく、それは私が法を説くという姿勢ではなく、ともに聞いていくという態度のなかに、おのずから教えが伝わっていくのであるということをおのずから学びたいものであります。

(司 教)